

伝わらない物語を綴るということ  
——『水の子』と吃音者キングズリー——

福田 泰久

英語英文學研究 第60卷（2016年3月）別刷

*HIROSHIMA STUDIES*  
*IN ENGLISH LANGUAGE AND LITERATURE*

広島大学英文学会

# 伝わらない物語を綴るということ

——『水の子』と吃音者キングズリー——

---

福田 泰久

---

## I はじめに

「吃音者の人生は惨めな人生である」<sup>1</sup>と述べたのは、国教会牧師であり作家のチャールズ・キングズリー (Charles Kingsley) であった。弁護士ジョン・ブラー (John Bullar) 宛ての書簡に記されているように、キングズリーの吃音は甘汞 (水銀) の多量摂取に起因する神経性吃音であったことがわかっている。<sup>2</sup> 主治医はルイス・キャロル (Lewis Carroll) などを患者に抱えていた言語療法士のジェームズ・ハント (James Hunt) 博士であり、その著書に付されたキングズリーの礼状から判断する限り、二人の関係は信頼関係の醸成された極めて良好なものであったと言ってよい (Hunt 173-74)。ただし急いで付言するならば、キングズリーは終始吃音に悩まされていた訳ではなかったようだ。1850年代初頭に過ごした、エヴァズレー (Eversley) 牧師館での日々を回顧するジョン・マーティノー (John Martineau) の手記には、神の代理として語る説教では、吃音に煩わされることのなかったキングズリーの姿が描き出されている。

In conversation he had a painful hesitation in his speech, which diminished as he got older, though it never wholly left him. But in preaching, ... he was wholly free from it. He used to say that he could speak for God but not for himself .... (HLMHL. Vol. 1. (2011) 303)

この逸話は、ともすれば神との合一こそが吃音寛解の鍵であったことを示唆しているようにも読めるが、その一方で、1850年代半ばには一時期傾倒していたキリ

---

<sup>1</sup> “The Irrationale of Speech” 6 を参照。以下、“IS” と略記する。

<sup>2</sup> Kingsley, *Charles Kingsley: His Letters and Memories of His Life*. Vol. 2 (2011) 18 を参照。以下、HLMHL と略記し出版年数を括弧で示す。また Chitty 27, Klaver 441-42 も参照。甘汞は『水の子』においても批判の対象となっている。Kingsley, *The Water-Babies: A Fairy Tale for a Land-Baby* (Oxford: Oxford UP, 1995) 109。以下、同書からの引用は頁数のみを記す。

スト教社会主義から次第に距離を置くようになり、<sup>3</sup> ハンプリー・カーペンター (Humphrey Carpenter) も指摘する通り、『水の子』(*The Water-Babies: A Fairy Tale for a Land-Baby*) の執筆時期は、幼少期からの神経衰弱のぶり返しと併せ、キリスト教信仰が相対的に低下していた時期と重なる (36)。

キングズリーの吃音に関する先行研究は、現在のところルイズ・リー (Louise Lee) による考察において他にない。『酵母』(*Yeast*) や『オールトン・ロック』(*Alton Locke*) といった初期の社会小説では、言葉の力による分裂した社会有機体の再統一の模索と、その挫折に起因する言葉への諦念が描かれる一方、1855年に上梓された『おーい、船は西行きだ!』(*Westward Ho!*) から『愛国者ヘリウォード』(*Hereward the Wake*) に至る中・後期小説では内省的な感傷は後景へと退き、一転して筋肉的キリスト教の具現としてのマチズモが前景化される。キングズリーの宗教的改悛の痕跡をその作風の変化にたどるリーは、40年代後半から50年代半ばにかけての叙述スタイルの転換を、神という「外部の声」による労働者階級の慰藉に失敗したキリスト教社会主義者キングズリーが、敬神と身体鍛錬を融合させた筋肉的キリスト教徒としての「内部の声」へと軸足を移す、変節の過程に重ね合わせる。

リーも指摘する通り、キングズリーが吃音を器質的・神学的両面から捉えていたことは明らかである。だが、いささか論点を先取りするならば、キングズリーは神学思想のみならず、科学思想、とりわけダーウィン (Charles Darwin) 流進化論による吃音治療を模索していた節がある。しかも、リーが考察対象から外した『水の子』こそ、宗教言説と科学言説によって織り成された作品であることを考えれば、この物語がキングズリーの吃音を考える上でとりわけ重要な位置を占めることは疑いない。そこで本稿は、まずは『水の子』においてキングズリーが示す言葉への不信を明らかにする。吃音者にとって、他者に正確に受け取ってもらえない話し言葉への不信はいかほどのものであろうか。ある者は言葉に詰まりながらそれでも人との交わりを求め、またある者は吃音に嫌気し内向しがちとなる。明らかにキングズリーは前者であるが、その拠り所となったのは、自らの発声器官を神に差し出しているというリアルな感覚だったのであろう。だが、仮にその感覚が偽りであったとすれば、そして、自らを受容器とする神の言葉が、さらに言えば「内部の声」さえもが伝わらなかったとすれば、キングズリーは再

<sup>3</sup> ヒューズ宛ての書簡に、キリスト教社会主義への関与が誤りであったとしたためている。Kingsley, *Charles Kingsley: Letters and Memories*. Vol. 1. 367を参照。

<sup>4</sup> キングズリーの第5作『二年前』(*Two Years Ago*) の評者 T. C. サンダース (T. C. Sanders) が、1857年2月21日付の『土曜評論』(*Saturday Review*) 誌上での書評で用いた造語だとされる。

び自らの内面と向き合わざるを得なくなる。その時、キングズリーは吃音という傷を負った発話、ひいてはすぐさま下で明らかにされるように、伝わらない叙述の先に何を見出すのか。

## II 神の声の限界

200万人規模のデモ行進がロンドンで行われた1848年4月10日、キリスト教社会主義の指導者であるJ.M. ラドロウ (John Malcolm Ludlow) とともにキングズリーも現地入りし、12日には「イングランドの労働者たちよ！」と題するポスター掲示と演説を行った。劣悪な環境に置かれている労働者へ同情を示す傍ら、ポスターには「世界的な不信、不景気、窮乏の深みにはまり込むことになる暴動危機の回避」を促す檄文が踊り、真の自由とは選挙権によってもたらされるものではなく、個々の精神陶冶によって勝ち取るべきものであり、「美徳なき真の自由も、宗教なき真の科学も、そして神への畏敬と同胞市民への愛なき真の産業も存在しない」<sup>5</sup>と訴えかけた。オックスフォード運動と福音主義を調停する第三極としてのキリスト教社会主義は、その間口の広さゆえに、「王党派であると同時に議会派でもあり、リベラルであると同時に保守でもある」(Vance 94) キングズリーの、革命的気運に冷水を浴びせる演説を受け入れる寛容さを持ち合わせていたのだと言える。<sup>6</sup> したがって十分予想されたこととは言え、ロンドンでの訴えは労働者に効果的に届くことはなかった。キングズリーはラドロウに宛て、「冒険的なことに、神の御言がわたしだけにやってきて、わたしだけがそれを発していると考えていました」(*HLMHL*, Vol. 1 (2011) 459) と書き記しているが、これは、信仰を手段ではなく目的とする者が陥る陥穽の例としてマックス・ピカート (Max Picard) が挙げた、神託を背負わされたと思ひ込む仮構のメシアニズムである (255)。こうして、吃音で途切れがちな自身の言葉を担保する神の声はもとより、ポスターに書き付けた文字さえも届かなかったことで、デモの記憶も生々しい同年7月から『フレイザーズ・マガジン』(*Fraser's Magazine*) で連載された『酵母』には、話し言葉と書き言葉への不信が散見されることとなる (Lee 5)。

「冗談を言おうとした途端、咳き込んでしまい丸つぶれとなって」(*Yeast* 7) しまうなど、言葉の躓きが冒頭早くも描かれる『酵母』の主人公ランスロット・

<sup>5</sup> Kingsley, *HLMHL*. Vol. 1. (2011) 156-57. また, Carpenter 32も参照。尚, この檄文は文言が修正されたのち, キリスト教社会主義者の機関誌 *Politics for the People* 第2号に再掲されている。Maurice 28-30を参照。

<sup>6</sup> Hall は *Politics for the People* の各記事における隠喩分析を通して, 階級間格差の是正どころか, 逆に階層化の再強化へと働いたキリスト教社会主義者に通底する保守性を指摘している。Hall 45-64を参照。

スミス (Lancelot Smith) は、物語の終盤、ブレイスブリッジ (Bracebridge) 大佐の許を訪ねる。普段の豪放磊落な性格は影を潜め、意気阻喪している大佐は、かつて男女の関係にあったメアリー (Mary) が出産したこと、赤子が自分に瓜二つであること、泣き声を耳にしたことなどを譚言のように繰り返すが、実際には、メアリーが死産を隠匿した廉で拘留されていることを、我々読者もスミスも既に知っている。獄中のメアリーが恨み言を書き連ねた手紙によって大佐は自死を選ぶが、むしろ書き言葉への不信という点で重要なのはそのあとのくだり、すなわち、大佐亡きあと手紙が他人の目に触れることを、より正確に言えば、曲解・誤読の末、死屍に鞭打つ事態に発展することを恐れたスミスが「手紙を細かく引き裂き飲み込んで」(276) しまうことにある。

言葉への不信は、後期の著作『水の子』においても継続している。比較解剖学者のリチャード・オーウェン (Richard Owen) がモデルと思しき教授は、水の子を目の当たりにしたにも拘わらず、自然の理に反するがゆえにその存在を頑なに認めようとしなない。そこで、オウホウ夫人 (Mrs. Bedonebyasyoudid) は教授の頭のなかにありとあらゆる架空の化け物を詰め込み、凝り固まった「科学的」精神を解きほぐす荒療治を行う。それまでの「常識」をことごとく打ち砕かれ、錯乱した教授はついに水の子に助けを求めるが、傍らで見守る、いまだ「科学的常識」に囚われた医者たちにその声は決して届かない。しかも、彼らのまとめた病状報告書の「氾濫する言葉の波に押しつぶされ、冗長な文章に今にも絞め殺されそう」(89) になったジョン (John) 閣下夫人は、寝室に逃げ込んでしまう。精神陶冶の旅の途中、トム (Tom) が出くわすのも、同様の荒唐無稽かつ過剰な言葉の横溢である。ある者は、「わしは嘘などついておらん。名誉にかけてついておらん」(110) と嘘をつき、またある者は、トムがどこへ向かっているのか尋ねもしないで道案内を買って出てはつねに誤った道を教え (160)、またあるカブは、トムの話聞いたそばから忘れてしまい、やがて「使すぎた脳が溶けて流れだして」(166) しまう。「もしわしのお話が気に入らないのなら、学校へ行って九九の勉強をするといい。[...] 諺にもある通り、世の中を作るにはいろいろな人が必要だからね」(46) という、読者に対する投げ遣りな、それでいて意図を汲んで欲しいと哀願するような語りには、その過剰さゆえに、あるいはその過剰さにも拘わらず伝わることのない言葉への、キングズリーの苛立ちが透けて見える。オックスフォード版の編者ブライアン・オルダーソン (Brian Alderson) の言葉を借りれば、「物語を紡ごうという情熱よりも説教への情熱」が上回ったために、度重なる「プロットの中断」に加え、「その進行度合いや言葉使いに変更」が生じ、結果的にその趣意に幾分ずれが生じたことは確かであろう (“Introduction” xiv)。

『酵母』においてそうであったように、『水の子』においてもプロットが「咳き込んで」しまうことで逸脱し、逸脱することで読者への釈明に追われ、さらにプロットは遅滞する。そして、遅滞による動揺から読者の顔色を窺うことで、プロットはより一層本筋から離れてゆく。顔色を窺うのは承認欲求の現れであり、肥大した自意識の裏返しである。「人見知りには他人から褒められたいという願望がつねにある」と、友人トマス・ヒューズ (Thomas Hughes) に語るキングズリーは、続けてこう打ち明ける。人見知りの原因である「[吃音は] 悩みの種なのだ」と (Kingsley, *Alton Locke* 40)。

### Ⅲ 吃音治療としての進化論

1857年1月、気恥ずかしさから他者を遠ざけもし、同時に遠ざけた他者からの称賛を欲しもする吃音を治療するため、ハーレー (Harley) 街のハント博士を訪ねたキングズリーは、その施術方針に絶大な信頼を寄せ、同年8月にはスウォンジー (Swansea) にあるハントの自宅を訪れ、治療の続きを受けている。この辺りの経過と持論、そしてハントの著書紹介をまとめ、59年7月号の『フレイザーズ・マガジン』に寄せた書評が「発話の不合理」 (“The Irrationale of Speech”) である。「卑しい心の動揺、臆病、卑屈、意地悪、虚栄、称賛の渴望」を避けなければ、「多くの者を即座にどもらせてしまう」(11) と指摘するキングズリーの口吻からは、器質的・機能的障害はもとより、道徳的障害をもその因子の一つに数えていたことがうかがえるが、さらに続く文章において、器質的・機能的領域を扱う科学的方法論としてのハントの施術と、道徳的・倫理的領域を扱う神学思想としての自身の矯正法が混じりあい、科学と神学の融合が果たされる。

But, over and above what Mr. Hunt or any other man can teach; stammerers, and those who have been stammerers need above all men to keep up that *mentem sanam in corpora sano*, which is now-a-day called, somewhat offensively, muscular Christianity .... (11)

『衣装哲学』 (*Sartor Resartus*) において、トイフェルスドレック (Teufelsdröckh) は「人生の目的は思索にあるのではなく、行動することにある」(96) と述べたが、これを雛型とするのが身体鍛錬と敬神を標榜する筋肉的キリスト教である。そのモットー、「健全な精神は健全な肉体に宿る」、すなわち肉体が精神を規定するの

ではなく、精神が肉体を規定するこの神学思想<sup>7</sup>は、吃音治療の理論的支柱となっただけではない。それは、キングズリー自身を律する法であると同時に、『水の子』の想定読者である子どもたちがキリスト教徒として遵守すべき法でもある。

「一度もお祈りの仕方を教わったことがなく、神様やキリストの話も聞いたことがない」(5) トムは、ハーソヴァ (Harthover) 屋敷の煙突掃除の注文を快く「引き受ける」(to take orders)。と同時に、ゆくゆくは「聖職に就く」(to take orders) ことがここでは仄めかされているが、今後のトムの精神陶冶における理論的参照枠が、先の筋肉的キリスト教である。その過程において、オウホウのお菓子を黙って失敬してしまったトムの身体は「ユニみたいに棘だらけ」になってしまうが、それは、「トムが悪戯ばかり考えて心が棘だらけになってしまった」(119) からだ。精神が肉体を規定する他の例としては、サケとマスの同族嫌悪(68)、親方グライムズ(Grimes)の改心の涙によって洗い流される顔の煤(177)、そして清く生きてゆくことを学ばなかったために醜い姿と成り果てたイモリ(182-83)などが挙げられるが、とりわけそのモットーが顕著に現れるのは、スキナヨニスル(Doasyoulike)国の住人たちを描く挿話においてである。住人たちは、それまで住んでいたコックベンレイ(Hardwork)国を捨て、温暖な気候で食べるために働く必要のまったくないスキナヨニスル国を建国する。そこでは、「丸焼けになった子豚が『さあ召し上がれ』と叫びながら走ってきて、口めがけて飛び込んでくるまで待っている」(126)ほど怠惰を極めているが、無論、そうした無為徒食は長く続かない。オウホウの警告を無視したために、火山の噴火と食物の焼失により人口は激減し、残った者のなかで環境に適応した者が地上を徘徊する猛獣を避け、食物を求めて樹上へと移動する。自然選択の結果、数千年を経たスキナヨニスル国の住人は、進化論の誤読としての反転した「進化」の末、人間からサルへとその姿を変えてしまう。

<sup>7</sup> “*mentem sanam in corpora sano*” という表現は、ローマの風刺詩人ユウェナリス(Juvenalis)の『風刺詩集』(*Satires*, x. 356) 第10歌に登場し、その該当箇所は次の通りである。「多くの供物を神に捧げることによって、諸君が神々から何かを求めたいというなら、自分自身に与えることができることを願うがよい。だからもし神に祈るなら、健全な身体に健全な精神があれば、と祈るべきであろう(Orandum est, ut sit mens sana in corpore sano)。」「健全な精神は健全な肉体に宿る」という表現は、通常、健全な身体を前提とした上で健全な精神を期待するほどの意味合いで用いられているが、引用から理解される通り、元々両者は並行関係にあり身体が精神に優越する訳ではない。詳しくはロック 298-99を参照。『水の子』ではその前提が健全な精神へと意図的にずらされているが、その理由として、キングズリーの実践したボクシング等のスポーツが幼いトムにはなじまないうえ、心理的側面から吃音軽減を試みるキングズリーのアプローチ(“IS” 11)を挙げることもできる。ただし、キングズリー自身、身体と精神のいずれを優越させるかについては一定せず、筋肉的キリスト教への態度には終始ブレが伴う。優先順位のブレと吃音の関係については稿を改めて論じるべき問題であろう。

Besides, they are grown so fierce and suspicious and brutal that they keep out of each other's way, and mope and sulk in the dark forest, never hearing each other's voice, till they have forgotten almost what speech is like ... And in the next five hundred years they were all dead and gone ... except one tremendous old fellow ... and M. Du Chaillu came up to him, and shot him ... And he remembered that his ancestors had once been men, and tried to say, 'Am I not a man and a brother?' but had forgotten how to use his tongue ... So all he said was, 'Ubboboo!' and died. (129-30)

吃音の進化論的治療を考える上でこの一節がとりわけ重要なのは、道徳的頽廢が身体的退化を惹起するのみならず、発声能力の著しい低下をも伴うことが示唆されているからである。かつてキングズリーが、「慰めがあるとなれば、吃音者は早死にするということだ」(“IS” 6) と、鬱々とした調子で俗説を述べた時、その胸中にあったのは、無論吃音に対する悲観だったのであろう。他方でこの発言は、スキナヨウニスル国の住人の末路が示すように、(早)死による道徳的墮落の放置の贖罪、すなわち、身体的退化としての吃音を自らの道徳的墮落の帰結と捉える、気の滅入るような自戒ともなりうるのではないか。

#### IV 「内部の声」の限界と機械仕掛けの神

世の中のあらゆる事象を差配する、神の似姿としてのオウホウとゼンコウ (Mrs. Doasyouwouldbedoneby) の姉妹、アイルランド人の女、そしてマザー・ケアリー (Mother Carey) は、「あらゆる物質界の基底には奇蹟的かつ神聖な要素がある」(HLMHL. Vol. 2. (2011) 137) という、『水の子』の主題を体現する神的存在であるが、こうした汎神論的傾向は、自然科学となんら矛盾するところのない信仰を告白する50年代半ばの書簡に早くも見出せる。

Those who fancy me a 'sentimentalist' and a 'fanatic' little know how thoroughly my own bent is for physical science; ... how, again, my theological creed has grown slowly and naturally out of my physical one, till I have seen, and do believe more and more utterly, that the peculiar doctrines of Christianity ... coincide with the loftiest and severest science. (HLMHL. Vol. 1. (1910) 299)

預言や奇蹟を基にした啓示神学に対して、自然界の事象を、ある目的を持った神のデザインの現れと見ることで造物主としての神の存在を認識する自然神学を、

広教会派の牧師であるキングズリーが奉じていたことになんら不思議はない。

一方『水の子』において、科学は「妖精たちの女王であり続ける」(48)。煙突掃除の「注文を受ける」ことが「聖職に就く」端緒であったはずのトムが、精神陶冶の旅を終えた今、「鉄道線路、蒸気エンジン、電報、ライフル銃を設計した『偉大な科学者』」(182)になっていることから理解されるように、吃音治療同様、『水の子』を科学言説と宗教言説によって書き上げたキングズリーは、本来相容れないはずの科学とキリスト教を意図的に撚り合わせる。可知の領域を研究対象とする科学と不可知の神を奉ずるキリスト教を、十把一絡げに扱うことにいささかのためらいも感じられない理由の一つに、「思慮深さとは無縁な」(Vance 78)キングズリーの過剰な行動主義ゆえの軽挙妄動を挙げることもできるだろう。リベラルな神学思想の持ち主であったキングズリーにとって、両者を架橋することにそれほど痛痒を感じなかったのは確かである。だが、ひとたび吃音者としてのキングズリーに目を転じれば、両者の調停は決してその場しのぎの短慮軽率ではなくなるのである。

自らも貝類の蒐集と研究に勤しむ玄人はだしの博物学者であったキングズリーは、『種の起源』(*On the Origin of Species*) 謹呈への礼状のなかで、本書から二つのことを学んだと記している。一つは「種が恒久不変であるという教義に疑いを差し挟む」余地のあること、もう一つは「自ら発達して [……] 有用な種になる能力を持つ原型種を、神が創造された」<sup>8</sup>ことである。後者については、「生き物が自分で生まれてくるように仕向けてあげる」(149)という、マザー・ケアリーの台詞を引き合いに出すまでもなく、ダーウィンが環境に求め、社会進化論者のハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) が種それ自体の能力に求めた種の進化を、キングズリーは神意に求めた。しかも神意による進化の過程とは、加点方式によるモラルの蓄積の過程であり、キリスト教徒としての義務の放棄は即減点に繋がる。<sup>9</sup>「もしわたしが獣を人間に変えることができるとすれば、同じ環境と淘汰と生存競争の法則によって、人間を獣に変えることもできるのです」(131)と、スキナヨウニスル国の歴史をオウホウが総括するように、神意に沿わない振る舞いを重ねた者は「退化」の憂き目に遭うのである。したがって、「いったん吃音という悪癖が生じたとしても [……] 森羅万象と調和することで [……] まるでトリックのように積年の悪癖が口中から消える」(“IS” 10)と断言するキングズリーには、「退化」としての吃音を、森羅万象に宿る神意に沿うことで、治療=進化できるという強い思い(込み)があった。無論、その振る舞いが必ずし

<sup>8</sup> <<http://www.darwinproject.ac.uk/entry-2534>> を参照。

<sup>9</sup> 進化・退化を左右するファクターとしてのモラルについては Beer 120, また Neil68を参照。

も奏功するとは限らないだろう。だからこそ、キングズリーは神意に沿わんと寸暇を惜しんで行動するのである。キングズリー自身を模したと思いきウワサ(Hearsay)国の巨人はこう述べる。「神意がどういものかはわかりません。ですが、そんなことは構わないのです。[……]目の前の務めを果たせ [……]これがわたしのモットーなのですから」(163)と。

それでは、なぜトムは科学者になることを選び、聖職者にならないのか。『オールドトン・ロック』では、ロックの従兄弟ジョージ(George)が閑職の教区を手に入れようと、心にもない信仰告白をでっちあげるほど躍起になったのとは対照的に、精神浄化の旅の末、水の子から晴れて再び人間となったトムは、そもそも聖職者になろうというそぶりさえ見せない。加えて、神という「外部の声」に行き詰まり、筋肉的キリスト教という「内部の声」へと舵を切った小説の一つが『水の子』であるとすれば、言葉への不信が依然として継続している点をどう理解すればよいのであろうか。これらの点を部分的に明らかにするため、補助線を引いてみたい。補助線となるのは、『水の子』を「なぞなぞ」として読むよう読者に求めたキングズリーの所為の妥当性についての検証である。

扉に付された端書によれば、『水の子』とは想定読者である子どもたちが読み解かなければならないなぞなぞであるとされている。無論、なぞなぞであるからには導き出される答えは時に複数に及びうるし、本来的な読書行為という観点から捉え直してみても、各挿話の解釈如何によっては導き出される答え＝解釈が複数生じることを考えれば、物語をなぞなぞと捉えることに一定の合理性はあるだろう。ところが、キングズリーは別解を許さない。いみじくも終章のタイトルが示す通り、キングズリーがなぞなぞに対して用意する、読書行為を通じた論理的帰結としての答えはただ一つ、すなわち、理想的キリスト教徒の「モラル」(182)である。終章が示唆するのは、物語を読み進めるなかで得たヒントを合算して導き出される解はつねに一つでなければならないということである。別言すれば、キングズリーにとってのなぞなぞとは、前提たるヒントが真であれば、結論たる解もまた真となるものだ。だが、読書行為が本来有する不確かさからも明らかのように、これをなぞなぞと呼ぶことには無理があるだろう。

ウワサ国の挿話において、先述した巨人はエピメテウス(Epimetheus)の子孫であるがゆえに、後退りでなければ前へ進むことができない。過去を振り返らず、遠い未来を虚しく見つめ続けるプロメテウス(Prometheus)が「演繹的な哲学者」(152)として読み換えられる一方、過去に目を凝らすうち次第に経験を重ね、典型的な事象のパタンを見出すことで科学者として大成するエピメテウス

は、帰納的哲学者として読み換えられる。<sup>10</sup> 同じくエピメテウスの子孫であり、後退りで歩を進めるトムの精神陶冶の旅の内実は、水の子というタブラ・ラサの状態から、水の子の存在証明 (39-44)、愚かな流行を娘に強要した廉でオウホウに罰せられる母親 (109)、ありもしない戦禍に逃げ惑うウワサ国の住人 (161)、そして、テキスト全体に渡る科学者、宗教家、教師らの頑迷な理論に象徴される先入観や錯誤の排除を経て、理想的な筋肉的キリスト教徒への宗教的回心に帰結する帰納法となっている。『水の子』における晦渋な言葉の氾濫<sup>11</sup>は、より確からしい結論を導くために個別的事例を幾何級数的に増大させた皮肉な結果であり、過剰な情報量は却って想定読者である子どもたちになぞなぞの答えを見失わせることになりかねない。いや、そもそも答えなど見つかるはずはないのだ。それは、ヒューム (David Hume) 的な懐疑論によって否定されるからではない。むしろ、帰納的「なぞなぞ」を演繹的「なぞなぞ」へと読み換えた挙句、それを帰納的物語によって読み解かせようとする誤謬に加え、かつて労働者を慰撫しようとしたキングズリーの言葉そのものが傷を負っていた (Lee 12) のと同様、『水の子』を紡ぐ言葉にも傷があるからに他ならない。初期の社会小説とそれ以降の著作の転換期に当たる1855年8月6日、F. D. モーリス (Frederick Denison Maurice) に宛てた書簡のなかで、自身の発声器官を神に差し出したキングズリーは、ウィットを織り交ぜた饒舌に陥りがちな自身の発話を諫めてくれる吃音を神に感謝した。

I [. . .] thank God every day of my life for this paralytic os hyoides [sic] of mine, which has kept me low, and makes me refrain my tongue and my soul too, whenever I try to be witty or eloquent, under the penalty of stuttering dumbness. (*HLMHL*. Vol. 1. (1910) 352)

そのおよそ10年後、「内部の声」へと転換した『水の子』では、声の権威は自らに引き戻された。しかしながら、『水の子』において自身が創造した、声の真理を担保するはずの神はその超越性を剥奪されてしまう。

<sup>10</sup> 先見の明のあるプロメテウスの警告を無視し、パンドラ (Pandora) に誑かされ箱を開けてしまったエピメテウスは、その名が示す通り、失敗を後から振り返り後悔する者とされる。当時の多くの科学者同様、熱心なベーコン (Francis Bacon) 主義者であったキングズリーは、経験の積み重ねから物事の道理を見極めるエピメテウスを高く評価した。こうした世評の読み換えは、1869年にブリストル (Bristol) のクリフトン・コレッジ (Clifton College) で開催された、社会科学総合学会 (Social Science Congress) の教育部門での講演においても見出せる。Kingsley, *HLMHL*. Vol. 2. (2011) 298-304を参照。

<sup>11</sup> 例えば Chitty 219; Cunningham 121; Johnston 215; Leavis 155等を参照。

'I [Mother Carey] work by machinery, just like an engine; and am full of wheels and springs inside; and am wound up very carefully, so that I cannot help going.'

'Was it long ago since they wound you up?' asked Tom. For he thought, the cunning little fellow, 'She will run down some day; or they may forget to wind her up, as old Grimes used to forget to wind up his watch when he came in from the public-house: and then I shall be safe.' (108)

筋肉的キリスト教の神は「機械仕掛け」<sup>12</sup>としてその姿を現し、『水の子』の傷を負った饒舌な言葉は躓き、どもる危険性をつねに孕む。中・後期の著作群の一つである『水の子』の言葉を揺るがせ、「なぞなぞ」の解答をつねに先送りさせるのは、「機械仕掛け」の神を森羅万象を差配する権威者に据え、その神を後ろ盾にした過剰な説教譚に終始するからに他ならない。そして、今や寄る辺なき『水の子』は、物語自体を否定する言葉を、その物語を締め括る最後の一節に用意する。「たとえお話が本当だとしても、一言だって信じる必要はないのだよ」(184)と。伝わらない物語を綴り続けることは、伝わらない言葉を発し続けることに似ている。だが、たとえ伝わることがないとしても、それでも言葉を発し続けることでしか吃音を生きることはできないし、言葉を綴り続けることでしか真理に肉薄することはできない。言葉を放棄してしまえば、沈黙の内に生きる他ないのだから。最後にピカートの言葉を記すことで、本稿の締めくくりとしよう。

真理がなければ、言葉は、ただ沈黙のうえに漂う漠然たる霧のごときものに過ぎまい。真理がなければ、言葉は崩れ落ちて一つの不明瞭な絶え間のない吃音になってしまうだろう。真理によって初めて、言葉は明確な、堅固なものになるのである。(22)

## 引用文献

- Beer, Gillian. *Darwin's Plot: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteen Century Fiction*. 3rd ed. Cambridge: Cambridge UP, 2009. Print.
- Carlyle, Thomas. *Sartor Resartus*. London: Chapman and Hall, 1864. Print.
- Carpenter, Humphrey. *Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's*

---

<sup>12</sup> 機械仕掛けの神は、1871年のデヴォンシャー協会 (Devonshire Association) での会長演説にも現れる。Kingsley, "President's Address" 382を参照。

- Literature*. London: Farber and Faber, 2009. Print.
- Chitty, Susan. *The Beast and the Monk: A Life of Charles Kingsley*. London: Hodder and Stoughton, 1974. Print.
- Cunningham, Valentine. "Soiled Fairy: The Water Babies in its Time." *Essays in Criticism* 35. 2 (1985): 121-48. Print.
- Hall, Donald E. ed. *Muscular Christianity: Embodying the Victorian Age*. Cambridge: Cambridge UP, 2006. Print.
- Hunt, James. *Stammering and Stuttering, Their Nature and Treatment*. London: Longman, 1861. Print.
- Johnston, Arthur. "Kingsley's Debt to Darwin." *English* 12. 72 (1959): 215-19. Print.
- Kingsley, Charles. *Alton Locke, Tailor and Poet An Autobiography*. Vol. 1. 1849. London: The Cooperative Publication Society, 1898. Print.
- \_\_\_\_\_. *Charles Kingsley: His Letters and Memories of His Life*. Vol. 1. 1877. Cambridge: Cambridge UP, 2011. Print.
- \_\_\_\_\_. *Charles Kingsley: His Letters and Memories of His Life*. Vol. 2. 1877. Cambridge: Cambridge UP, 2011. Print.
- \_\_\_\_\_. *Charles Kingsley: His Letters and Memories of His Life*. Vol. 1. 1877. London: Macmillan, 1910. Print.
- \_\_\_\_\_. *Charles Kingsley: Letters and Memories*. Vol. 1. 1877. London: The Cooperative Publication Society, 1899. Print.
- \_\_\_\_\_. "The Irrationale of Speech." *Fraser's Magazine for Town and Country* 60 (1859): 1-14. Print.
- \_\_\_\_\_. "President's Address." *Report and Transactions of the Devonshire Association for the Advancement of Science, Literature and Art* 4.1 (1871): 377-95. Print.
- \_\_\_\_\_. *The Water-Babies: A Fairy Tale for a Land-Baby*. 1863. Oxford: Oxford UP, 1995. Print.
- \_\_\_\_\_. *Yeast: A Problem*. 1851. London: Macmillan, 1883. Print.
- Klaver, J. M. I. *The Apostle of the Flesh: A Critical Life of Charles Kingsley*. Leiden: Brill, 2006. Print.
- Leavis, Q. D. "The Water Babies." *Children's Literature in Education* 7. 4 (1976): 155-63. Print.
- Lee, Louise. "Voicing, De-voicing and Self-Silencing: Charles Kingsley's Stuttering Christian Manliness." *Journal of Victorian Culture* 13. 1 (2008):

1-17. Print.

- Maurice, F. D. et al. *Politics for the People*. London: John W. Parker, 1848. Print.
- Neil, Anna. "Marvelous Plasticity and the Fortunes of Species in *The Water-Babies*." *Philosophy and Literature*, 38 (2014): 162-77. Print.
- Sanders, T. C. "Two Years Ago." *Saturday Review or Politics, Literature, Science, and Art*. 69. 3 (1857): 176-77. Print.
- Secord, Jim et al, eds. *Darwin Correspondence Project*. American Council of Learned Societies, University of Cambridge, 12 Mar. 2015. Web. 28 Sep. 2015. <<http://www.darwinproject.ac.uk/entry-2534>>.
- Vance, Norman. *The Sinews of the Spirit: The Ideal of Christian Manliness in Victorian Literature and Religious Thought*. Cambridge: Cambridge UP, 1985. Print.
- ジョン・ロック. 『子どもの教育』. 北本正章訳. 東京: 原書房, 2011年. Print.
- マックス・ピカート. 『沈黙の世界』. 佐藤利勝訳. 東京: みすず書房, 2014年. Print.

愛知教育大学

Writing an Unintelligible Story:  
*The Water-Babies* and Kingsley, the Stammerer

---

Yasuhisa Fukuda

---

In treating his stammering, Charles Kingsley equally built a good relationship with James Hunt and also with God himself. In the article contributed to *Fraser's Magazine* in 1859, Kingsley seemed to try to cure his own stammering not only with a scientific method but with his theological one, viz muscular Christianity. Its maxim, "*mentem sanam in corpora sano*" (a sound mind in a sound body), also prescribes *The Water-Babies: A Fairy Tale for a Land-Baby* (1863), along with contemporary scientific issues, particularly evolutionary theory.

It is well known that Kingsley advocated the theory of evolution, albeit being a reverent Anglican priest. As to the main factors in the evolution of species, whilst Charles Darwin and Herbert Spencer posited environment and capacity of species respectively, Kingsley undoubtedly assumed the divine will. It is not only because that he was a liberal minded broad church parson who grew up to be an amateur naturalist, but because he seemed to take his stammering for a moral defect as well as a physical one, and regard the theory as a possible remedy for his infirmity. In other words, he deliberately misread the theory, following the divine providence to cure or evolve his disease as a (moral) atrophy. The paper's aim is to show that it is by no means myopic for Kingsley to reconcile science with Christian theology in both the stammering cure and *The Water-Babies*, despite his excessive impetuosity often pointed out.

Kingsley was optimistic enough to preach through God's voice (a voice from outside) in the late 1840's, but this proved to be a fiasco, turning into muscular Christian (a voice from inside) around the mid 1850's. As we could see his distrust in both parole and écriture in *The Water-Babies*, a voice from inside does not work properly. The reason is quite obvious. Kingsley, who was an ardent Baconian scientist, regarded an inductive *The Water-Babies* as a "riddle" that the young readers must read. A riddle is a question that describes something in a confusing way and could have several answers, but it was only an answer that Kingsley prepared for the riddle: "Moral" of an ideal muscular Christian. In other words, Kingsley not only mistook an inductive

riddle for a deductive riddle but also made the young readers interpret the deductive one through the inductive story, *The Water-Babies*. Even though the answer for the riddle continually eludes, and the young readers cannot read the story 'correctly.' Kingsley must continue writing stories and talking to someone so that he should not fall silent, because the abandonment of communication is nothing but utter dumbness.

*Aichi University of Education*